# おこうだより

Kochi Medical School Campus Report

第23号
2026年3月

医学部総合防災訓練の様子

図書館前広場

合氣道部

## 未来を拓く、新たな力

特集　医学部総合防災訓練に参加して
——発災〜1時間の初動訓練を体験

高知大学医学部

# おこうだより　未来を拓く、新たな力


01　巻頭言　井上 啓史 医学部長

02　特集　医学部総合防災訓練に参加して ――発災～1時間の初動訓練を体験
西山 謹吾 危機管理医療学講座 教授
関　安孝 生体分子構造学講座 教授
刈谷 正志 学生課長
作田 勇一・北村 香帆・國土 もも 医学科１年
有馬 千遥・小西 剛聖 医学科２年

08　コラム　看護学科における防災の取り組み　多田 邦子 基礎看護学講座 教授

学生の活動

09　学生表彰
「感覚に優しい利用ガイドブック」作成を通じて　亀井 楓乃 医学科４年
フリースケート世界大会に参加して　中村 昌太郎 医学科３年

10　西医体優勝
女子バスケットボール部　松村 歩波 部長　医学科４年
卓球部　油野 颯希 部長　医学科２年

11　国際交流
アメリカの医療を学べるハワイ大学臨床実習　大内 雅子 医学科６年
台湾留学で感じた日本と台湾の医療の違い　上岡 美月 看護学科３年

12　第43回南風祭　田辺 康太 南風祭実行委員長　医学科２年

13　部活動紹介
合氣道部　幸﨑 祐亜 主将　医学科４年
写真部　秦 優里奈 部長　医学科５年

新任教授紹介
14　新任のご挨拶　宮地 英行 消化器内科学講座 教授
新任のご挨拶　池田（谷口）真理子 小児思春期医学講座 教授
15　新任のごあいさつ　山田 久方 免疫学講座 教授
教授就任のご挨拶　倉林　睦 病理学講座 教授
16　着任のご挨拶　岸　誠司 内分泌代謝・腎臓内科学講座 教授
新任のご挨拶　山縣 憲司 歯科口腔外科学講座 教授
17　新任のご挨拶　盛實 篤史 総合診療部 教授
新任のご挨拶　永井 立平 産科婦人科学講座 教授
18　新任のご挨拶　沖中 由美 臨床看護学講座 教授
地域と教育研究機関の架け橋に　野村 美紀 地域看護学講座 教授

退任のご挨拶
19　退任のご挨拶　佐藤 隆幸 生理学講座（循環制御学）教授
退任のご挨拶　大畑 雅典 微生物学講座 教授

20　医学部Topics 2025

DATA
23　令和7年度学生数／医師国家試験合格状況／看護師国家試験合格状況／保健師国家試験合格状況

編集後記　阿波谷 敏英 おこうだより編集委員会 委員長




# 巻頭言 ― かんとうげん ―

井上 啓史
医学部長

## 開学50周年　～これまでの感謝、これからの決意～

2024年に医学部長を拝命させていただき、「学生も教職員も地域も、ともにワクワクできる学びの場、高知大学医学部」をキャッチフレーズとして、これまで先進的な医学教育および医学研究を推進すべく、学部運営に取り組んで参りました。そして、2年後、2028年4月、高知大学医学部は、開学50周年という大きな節目を迎えようとしています。

1976年10月に高知医科大学として設置され、1978年4月には、第一期生を迎え入れ、開学いたしました。1981年4月、医学部附属病院が設置され、1998年4月、看護学科が設置されました。他人を思いやる利他の心を持って、人として正しい道を歩み「敬天愛人」、真実を大切にしつつも、新しいものを生み出そうと努める「真理の探究」という高知医科大学の建学の精神のもと、これまで5,700名以上の優れた医療人を輩出し、高知県のみならず国内外において数多くの卒業生が活躍しています。

この記念すべき節目にあたり、学生および教職員とともに、「高知大学医学部・旧高知医科大学開学50周年記念事業」を計画しております。この記念事業を通して、これまで50年間支えていただいた卒業生とそのご家族、関係者さらには地域のみなさまに心よりの感謝の意を表するとともに、これからの50年間を見据え、未来の高知大学医学部をしっかりと支える次世代の医療人育成強化に向けた取り組みを行います。その取り組みの柱となるものが、「医学部会館（通称 学生会館）の増築・改修」です。この医学部会館をリニューアルすることで、学部学生のみなさまの研究・学習環境のさらなる充実を図って参ります。この場をお借りし、記念事業の趣旨をご理解、ご賛同いただき、格別のご支援、ご協力を賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

本学は、先端医学と地域医療という社会が求める２つの大きなテーマを基軸として、未来の医療を支え、牽引していく高知ブランドの医師、看護師、医学研究者、医学教育者を育成し、高知から世界に向けて輩出していきます。我々高知大学医学部は、これからも一層の飛躍を目指して参りますので、引き続き、ご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

特集

座談会

# 医学部総合防災訓練に参加して
## ――発災～1時間の初動訓練を体験

令和7年12月5日、附属病院と医学部の初となる合同訓練「医学部総合防災訓練」が実施されました。訓練には、医学科生も被災した患者役などとして参加※。防災力向上に貢献しました。

今回は、防災訓練を企画・主導された西山謹吾教授を座長に、実施のキーマンとなった教員、職員、参加学生の皆さんに集まっていただき、当日を振り返っていただきました。

※看護学科生は授業の調整がつかず、今回は不参加となりました。

①

②

座　長：西山 謹吾 教授（危機管理医療学講座）写真①-中央　　実施日：令和8年2月20日
参加者：関　安孝 教授（生体分子構造学講座）写真①-左
刈谷 正志 学生課長 写真①-右
作田 勇一（医学科1年）写真②-左端
北村 香帆（医学科1年）写真②-左から2人目
國土 もも（医学科1年）写真②-中央
有馬 千遥（医学科2年）写真②-右から2人目
小西 剛聖（医学科2年）写真②-右端

**訓練実施概要**
【日時】令和7年12月5日（金）13:00～17:00
【想定】平日日中、南海トラフ地震が発生（M8.8　高知市・南国市震度7）
【内容】発災～1時間までの初動訓練（外来等／本部機能）、部署訓練、被害状況報告訓練

### 13時20分、地震発生！ でも放送が・・・聞こえない？！

**西山**　今日は医学部総合防災訓練に参加くださった皆さんと一緒に、訓練を振り返ってみたいと思います。

学生の皆さんは、訓練で患者役をされた方が3人、近隣住民役が1人、ボランティア役が1人ということですね。関先生は管理棟1階の学生災害対策室に、刈谷学生課長は管理棟2階の災害対策本部におられました。まず、最初の動きはどうだったのでしょうか？

**有馬**　私はボランティア役で、最初は校舎内にいました。実は発災自体がよくわからなくて・・・。放送が流れていたのですが、よく聞こえませんでした。

**西山**　放送があまり聞こえなかったという声は、全ての部署から出ていました。僕はそこにはこだわって、地震の揺れの音などを県から取り寄せて、それを流すようお願いしていたんですけどね。ガタガタガタ…という音が100秒間ほど流れていたはずなんですが、それがよく聞こえなかったわけですね？

**有馬**　はい。

**西山**　それでは困りますよね。これはぜひとも直さないとダメですね。実は、緊急地震速報も流したのですが、そちらも病院の方には流れなかったと指摘が出ていました。やってみたからこそわかったことですね。

### 建物内からの学生の避難 見つかった課題は？

**西山**　発災後、有馬さんはどこに避難されたんですか？

**有馬**　図書館の前の広場です。

**西山**　それからどう動きました？

**有馬**　10分ほどそのまま立ってました。

**西山**　誰からも誘導がなかった、ということですね。

**有馬**　点呼はしました。

**西山**　その点呼ですが、皆さんは点呼して誰がいないかわかりますか？

**北村**　いつも一緒の人たちと同じ空間にいたらわかると思いますが、被災してみんなが混乱していたら、点呼はあまり確実じゃないかもしれません。

**西山**　実は看護学科の方では毎時間出席を取っているんですね。全員取るのに5分くらいかかります。座る席も看護学科は決められているので、誰がいないかすぐわかります。けれど医学科はわからない。出席を取らない授業もあるし、途中から来る人もいるしね。

**作田**　今の話を聞いていると、医学科も毎回出席取った方がいいという気がしてきました・・・。

**西山**　安全面から言うとそうなんですよね。授業を受ける立場からするとどうでしょう？

**國土**　正直、大学でそこまでの拘束は必要ないんじゃないかなと思います。災害時の点呼は、誰がいないかが把握できたら自分たちの携帯で連絡を取ることはできるかもしれないので、意味がないわけではないと考えます。

**西山**　なるほどね。ただ、母数もわからない中、点呼でかなりの時間を取るのはどうだろうかとも思うんですね。

**小西**　大学に来てなくて違う場所に避難した人もいるかもしれません。その人を探すのに長く時間をかけるのは、建物が崩れるリスクなどもあり、判断が難しいところだなと思います。

中央診療棟1階

救急外来

2階外来

ボランティアセンター

**西山**　そうですね。皆さんは高知大学が安否確認メールを導入していることはご存知ですか？この安否確認メールがあるなら、それだけいいという気もするんですよね。もちろん教員は皆さんが避難した後、取り残された人がいないか見て回らなければなりません。安否確認メールは、皆さん練習しておいてくださいね。

### 一時避難をした後、医学生としてどう行動する？

**西山**　では屋外に避難した後、学生の皆さんはどうしますか？

**北村**　自分も含めけがをしている人がいないか確認します。

**西山**　そうですね。けがをしている人がいたら、教員に知らせます。では、けがはなかった、次はどうします？

**作田**　家族に自分の安否を伝えます。

**西山**　なるほど。家族も心配してるだろうから自分は大丈夫だと伝えたいですよね。では、そういう個人として必要なことはやりました、その次は？

**國土**　医学部生としてだったら、大学の敷地内や周辺にいるけが人や物資を運ぶ手伝いをしたいと思います。ただ、勝手な行動をするのもよくないので、まず先生方に自分たちがどう行動したらいいか確認したいと思います。

**西山**　大事なことですね。よかれと思っても勝手に行動するのはダメです。必ず指揮命令系統に従って行動しないといけません。

### 学生ボランティアセンターでの訓練の振り返り

**西山**　では、その学生ボランティアに関する訓練はどうだったのか。有馬さん、教えてください。

**有馬**　はい。私は実は、『ボランティアに参加しない学生』という役でした。

**西山**　そうですか（笑）。学生の中でも

ボランティアに参加したい人としたくない人がいると考えてその設定を作りましたが、参加しない方の役が当たったわけですね。

**有馬**　はい。そして『避難後、教室にスマホを忘れたから取りに行きたいと言う学生』でした。

**西山**　あぁ、あなただったんですね（笑）。感想文を読みました。

**有馬**　先生に『スマホを取りに戻りたい』と訴えたのですが、『え、今訓練中だから終わるまで待ってね』って言われて・・・。

**西山**　訓練じゃなくてリアルだと思われたんですね。

**有馬**　訓練だとわかるように『震災が起きて家族に連絡を取りたいので・・・』と言ったけれど、伝わりませんでした。

**西山**　そうなんですね。いかんなぁ。訓練の課題の一つですね。

**有馬**　あと、ボランティアに参加する、しないについても意思を聞かれることはなく、みんな一緒にボランティアの集団として集められました。

**西山**　『手伝ってくれる人はこちらの方に来てください』と職員が誘導することを想定していましたが、それがなかったわけですね。

**有馬**　自分はボランティアではないと伝えたらその場で待機するよう言われ、ずっと突っ立ってた感じでした。

**西山**　その後はどうなりました？

**有馬**　そのまま終了しました。ボランティア役の学生たちは病院に行ったのですが、そもそも移動の指示があったのが遅くて、行ったものの１回目の訓練が終了して何もしないまま帰ってきていました。

**西山**　それだと学生の皆さんは全く訓練にはならなかったですね。職員が趣旨を理解していなかったと思います。課題がたくさん見えてきました。

## 附属病院での訓練はどうだったのか？

**西山**　では、病院で患者役をしてくれた皆さんはどうだったのでしょう？

**北村**　私は今回、『30代女性、小児科外来前の廊下で窓ガラスが手首に刺さり、3〜4cmの縫合の治療が必要な患者』という役を与えられていました。

表１　訓練フロー（抜粋）

| セクション | | 各部門 | | | 発災後立上組織 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 外来部門 | 病棟部門 | 中診部門 | 災害対策本部<br>災害医療本部 | 学生災害対策室<br>ボランティアセンター |
| | | 総合受付<br>1階外来<br>2階外来<br>救急外来 | D棟8階 | 手術部・ICU<br>検査部<br>放射線部・PETセンター | 管理棟2階 第一会議室 | 管理棟1階 学生課 |
| 訓練の流れ | 13:00 | 訓練開始 | | | 訓練開始 | 訓練開始 |
| | 13:20 | 安全確保<br>被災状況確認<br>患者の状況把握<br>中断不可の治療の継続<br>患者避難<br>本部へ初期報告<br>診療判断 | | | 本部要員招集<br>本部設営<br>チームビルディング<br>情報収集・分析<br>通信・指示・記録<br>クロノロジー<br>診療判断（縮小・中止）<br>院内災害医療体制の構築<br>救護指揮センター統括指名 | 設置場所検討・設営<br>安否確認<br>安否不明者フォロー<br>被災者対応<br>授業継続計画<br>学生ボランティア参集<br>センター場所検討・設営 |
| | 14:50 | 反復訓練 | | | 反復訓練 | 反復訓練 |
| | 16:00<br>17:00 | 全体報告会（各セクションでの振り返りを報告） | | | | |

**西山**　先生方や医療スタッフはどういうふうに対応してくれましたか？

**北村**　まず廊下でうずくまる体勢をとっていたら、小児科の看護師さんが『大丈夫ですか。どうされましたか』と声をかけてくださって、けがの状態を説明すると、中に案内されました。

**西山**　その設定を作ったのは、縫合を小児科でやるのかそれとも外科外来に連れていくのか、どちらの対応をするのかなと考えたからです。

**北村**　私は小児科でそのまま対応してもらいました。『止血のために圧迫していてくださいね』と言われ、その後、小児科の先生が『傷口が大きいので縫合をします』という流れでした。

**西山**　小児科に縫合セットがあったんですね。処置をしてもらった後、支払いはどうされました？

**北村**　支払いをどうするかまでの質問は投げかけられませんでした。

**西山**　そこがリアリティなんですね。実際にはそこで支払いの問題が出てきます。処置してもらってそのまま帰っていいの？どうなの？って患者さんは聞くと思います。でも、そこはこちらで設定を作っておくべきでしたね。よくわかりました。

　他に感じたことはありますか？

**北村**　私は与えられた役に加えて、自分の子どもが迷子になったという設定を付け足したのですが、看護師さんに『気づいたら子どもがいなくなっていた』と伝えたら、他の科と連絡を取ってくださいました。『何歳ですか？』『服装は？』『何か病気があったりしますか？』などと聞かれたので、作った設定を細かく伝えると、『ここで安心して待ってくださいね』と声かけしていただきました。最終的に無事合流・・・という時、一人の看護師さんがそこに子どもがいるという設定でずっと手をつないで待っていてくださって、自分がもし母親だったらすごく安心だなと感じました。

## もし、治療中に被災したら？様々な想定で訓練

**小西**　私は60〜70代の男性で、歯科口腔外科で親知らずを抜歯中に被災するという役でした。対応はすごくスムーズで、役としていろいろと質問をしてもしっかり返答いただきました。

　一つ気になったのは、歯科口腔外科はスタッフ数も多いので、スタッフも患者さんも全員が身を守る場所を確保することは難しそうに見えたことです。そこが改善できたらよりよいのかなと思いました。

**西山**　なるほど。歯科口腔外科はいろいろな器具が置いてあって、スペース的にも少し狭いですよね。抜歯中に地震が来て、どうなりましたか？

**小西**　治療は中断して、ガーゼを当てながら痛み止めをいただきました。基本的にずっと医師の方が付き添ってくださっていました。

**西山**　そうですか。痛み止めは無料？

**小西**　おそらく無料ではないかと・・・？

**西山**　そうか（笑）。その辺りの説明があればよかったですね。

**小西**　『地震が収まって安全になったらまた来てください』と言われました。

**西山**　じゃあその時に清算ですね（笑）。わかりました。

## 訓練のリアリティをどこまで追究できるか

**作田**　自分は脳神経外科の外来に来た70代高齢男性患者の役でした。発災時は廊下の椅子に座って地震が収まるのを待ち、その後、事務職の方に脳神経外科の待合室へ誘導していただきました。事前に、学生は役になりきって質問をするよう言われていたので、『いつまでここ待ってたらいいですか？』と投げかけましたが、そこまで話が通っていなかったのか職員の方は戸惑われていました。

**西山**　発災は診察の前でしたか？

**作田**　はい。

**西山**　では、『診察は今日してもらえるんですか？』と聞いてみました？

**作田**　いや、聞いてないですね。そしてその後はもう学生の集合場所に案

1階外来

総合受付

内されました。

**西山**　患者さんはそこを聞きたいと思うんですよね。例えば『今日はもう診察やめて帰りましょうか?』と言ってみる。すると看護師さんは『はい、帰ってください』ではなく、『お待ちください。お名前を教えてください。〇〇さんですね。わかりました。先生に聞いてみます』そして、『先生、〇〇さんが今こんな状況だから一旦帰ろうかとおっしゃっていますが、よろしいですか?』すると医師が『いや、その方は帰ってもらっては困る』、『帰ってもらってもよい』と判断をする。そういうリアリティのある訓練をやってもらいたいと思っていたんですね。

**作田**　リアリティという意味では、学生の自分が70代の役をやると、真面目にやってもなんか面白くなっちゃうみたいなところがありました。だから、できれば地域住民の方に患者役として一緒に訓練に参加していただけたらよいのではと思いました。

**西山**　なるほど。次の訓練に参考になる意見をありがとうございました。

## 病院の患者さんだけなく、近隣住民のSOSにも対応が必要

**國土**　私は『自宅が倒壊して附属病院に避難してきた70代女性』という設定でしたが、直前に『自分の夫が生き埋めになっている』という設定も追加されました。そこで、総合受付で『夫を助けてほしい』と伝えたのですが、『わかりました、少し待っていただけますか』と言われてそのまま放置されてしまいました。役として不満を感じたので、他の職員の方にも同じようなことを訴えました。その後、被災者の声をメモしなければいけないという話が現場で出て、私の話も職員の方がメモをして『災害対策本部に伝えさせていただきます』という対応になりました。訴えは本部に伝わったと思うのですが、その後のフォローなどはなく、役としてずっと不安な気持ちでした。

**西山**　そうなんです。近隣住民の中には必ずそういう方も出てくると思います。それに対して『わかりました。なんとか対応します。あなたは〇〇の場所にいてください』と声を掛け、そしてやはり10分くらいの間にはどんな結果かお伝えしないといけないですよね。『混乱していて連絡がつかず、ご自宅まで行ける者がおりません』『警察本部に連絡していますので、ここでお待ちください』など、何らかの返答が必要です。

**國土**　そういうしっかりした返事や対応はなかったように思います。

**西山**　我々病院の医療従事者は、病院内のことだけではなくて、地域の方がそういったSOSを出してくることも想定しておかなければなりません。

**國土**　あと、私は腕と腰をけがしたという設定もあって、総合受付で『負傷した方はいらっしゃいますか』と聞かれて集められたものの、そのまま放置されてしまいました。けがは緊急性はなかったのですが、70代で腰が痛い人が立ったまま放置されたので、せめて座らせてほしかったなと思いました。

**西山**　そうですね。座る場所も床に直接でなく、毛布を敷いた上に座っていただくといった対応が必要ですよね。抜かっていることがよくわかりました。貴重な気づきです。

## 学生災害対策室、災害対策本部ではどうだったか？

**西山**　関先生は、学生災害対策室でどのようなことを感じられましたか?

**関**　マニュアルが非常に細かく設定されていて、実際の状況とそぐわない部分があることが今回の訓練でよくわかりました。

建物に人を探しに行くというようなことも全て本部にお伺いを立てなければいけない決まりになっていて、本部に電話をするんですけれど、まぁ返事が来ないんです。先ほどの『校舎に携帯を忘れて取りに行きたい学生がいる』という報告も上がって来ていましたが、建物に入る許可を得るために本部に連絡して返事待ち。そして待ってる間に一回目の訓練時間が終わるといった感じで、これでは全然動けないなというのが実感でした。

学生の皆さんのお話を聞いていて思ったのは、今回の取り組みは医療従事者や教職員の訓練として有意義だっただけでなく、学生の勉強にもすごくなったのではないかということです。災害時の多職種連携などを患者側から見て、医師はどう動くべきか、どのように対応したら患者さんが安心するのか、そういったことを学ぶ機会になったと感じました。

今回は1・2年生だけの参加でしたが、今後はぜひ年間予定にこの総合防災訓練を組み込んで、その日は授業なしで全学年全員が訓練に参加できるようにしたらよいのではと思います。

**西山**　本当にそうですね。学生課長の刈谷さんはどうでしたか?

**刈谷**　これまでの防災訓練は、筋書きがあってそれをこなすような形でしたが、今回は全く違いました。ただ、せっかく多くの学生さんにご協力いただいたのに、こちら側がもう少し上手に計画や運営ができればよかったなと申し訳なく感じています。私自身は災害対策本部で各部署と連絡を取る役割だったのですが、動きがわかってなくて皆さんにご迷惑をかけてしまったなと思います。

**西山**　以前の訓練はシナリオ通りに進んで、はい終わりました、皆さん問題はなかったですか?なかったです、で終わっていました。問題がなかったら別にやる必要はない。上手くいかないところを探すための訓練なんです。

今回はブラインド訓練でした。災害時に起こりうるだろう状況をたくさん想定し、さらに被災者役の学生がアドリブを加えてくれました。そこで問題点が出てくれば、訓練は成功です。たくさんの問題点がわかりましたね。

## 今後の訓練は、どうあるべき？

**西山**　先ほど、関先生から総合防災訓練は今後、授業の一環としてやってはどうかというお話が出ましたが、学生の皆さんはどう思いますか?

**有馬**　学年によってできることが違うと思うので、全学年が参加できるとうまく役割分担もできるのではないかと思います。4〜5年生は病院実習にも出ていて医療面でも知識や手伝えることがあると思いますが、1〜2年生はまだ力仕事しかできないので・・・。

**西山**　力仕事の中でも、患者さんのストレッチャーでの搬送や車椅子での搬送。その辺りは学生の皆さんにできることの一つです。担架搬送は素人がやるのは危険です。ストレッチャーの使い方、実は看護学科では以前から教えていましたが、医学科は今の2年生の学年から教えるようになりました。これは絶対、医師になる皆さんも学んでおくべきだと僕は思っています。

**関**　僕は東日本大震災の時、岩手県で大学教員をしていました。その時は薬学部だったので附属病院に教員や学生が手伝いに行くことはありませんでしたが、高知大学医学部で学生の皆さんがすごく前向きに訓練に臨んでくれている姿を見て、本当に素晴らしいな

学生災害対策室

簡易ベッドの設営

と思いました。また、ボランティアとして災害医療の現場を手助けすることをイメージして準備されていることを、とても頼もしく感じます。

非常時には教員も学生も上手く協力して行動できるよう、今後も訓練してけたらいいなと思っています。

**西山**　また来年度以降もこのような訓練を続けていきたいと考えています。学生の皆さん、その時はまたご協力をお願いしますね。今日はどうもありがとうございました。

## Column コラム

### 看護学科における防災の取り組み

多田 邦子 教授 基礎看護学講座

#### 1年生から「災害研修」

1年生では、大学基礎論の一つとして、「災害研修」を医学科と合同で行っています。授業の目標は、災害の基本的な知識に関する講義や演習を通して、将来医療従事者となる立場を自覚し、災害時に必要な心構えや果たすべき役割について考えること。学内の防災施設や設備、発災時の初動など、入学早期に具体的な学習を得ることで意識の芽生えにつなげます。

#### 「高知県総合防災訓練」にも参加

さらに1年生は、高知県主催の総合防災訓練に授業の一環として参加。学生はトリアージ訓練における「傷病者役」を担当します。トリアージ訓練は、治療の緊急性や症状の重症度から治療の優先順位を決定して搬入・治療などを行うもので、学生にとって臨場感のある経験となっています。また、この訓練には医学科および県内外の複数の大学からも学生の参加があり、将来の医療従事者となる学生間のネットワーク作りの場にもなっています。

#### 4年生では「災害看護学」

4年生では、医学科との合同授業「災害看護学」が行われます。この授業では午後半日にわたる演習が2日間あり、ロープ結びや三角巾による応急処置、担架による搬送、避難所の設置、傷病者収容のコントロールなどの充実した内容で、医療従事者に必要な災害現場でのマネジメントの意識付けを図ることができます。

トリアージ訓練の様子



activities

学生の活動

No.1

**学生表彰**

## 「感覚に優しい利用ガイドブック」作成を通じて

亀井 楓乃　医学科4年

私は児童青年期精神医学コースに所属しています。本コースでは、精神疾患を含む多様な背景をもつ方が公共の余暇施設を利用しやすくなるよう、「感覚に優しい利用ガイドブック」の作成に取り組んでいます。

匂い、音、光などの刺激に過敏となる「感覚過敏」は、自閉スペクトラム症の方に多い症状です。動物園や博物館といった施設は魅力が多い一方で刺激も多く、こうした環境では必ずしも十分に楽しめない場合があります。ガイドブックでは、刺激の強い場所やパニック時に落ち着いて休憩できる場所などの情報を可視化し、共有しています。事前にこうした情報を得ることで、利用者が安心して過ごせるようになることを目指しています。

今回は高知県にご協力いただき、香美市立やなせたかし記念館アンパンマンミュージアムのガイドブックを作成し、その内容をこども環境学会で発表させていただきました。同学会は「こども」に関わる保育、建築、福祉など幅広い分野の方が参加される学会であり、そこで賞をいただけたことは、多角的な視点から関心を寄せていただけた証であると感じています。この経験は、今後の活動に向けた大きな励みとなりました。誰もが自分のペースで余暇を楽しめる環境づくりに貢献できるよう、活動を続けていきたいと考えています。

また、日本精神神経学会学術総会においても同内容で発表の機会をいただき、学外での活動範囲が大きく広がりました。学生の間からこうした貴重な経験を得られたことに、深く感謝しています。

最後になりますが、日頃よりご指導くださる先生方、発表に耳を傾けてくださった皆様、そして本取り組みにご協力くださいました全ての方々に心より御礼申し上げます。

## フリースケート世界大会に参加して

中村 昌太郎　医学科3年

私は小学校6年生のころから、フリースケートを続けています。フリースケートはアメリカ生まれのスケートスポーツで、2つに分かれた板にそれぞれ2つずつ車輪がついており、左右のスケートを自在に操って、多彩な技を楽しむことができます。2025年5月には、茨城県土浦市で開催された世界大会に出場しました。3種目に出場し、ジャンプ台を使って飛距離を競うロングジャンプでは3位、30メートルのタイムを競うスプリントでは2位に入賞することができました。

ロングジャンプでは、ジャンプ時のバランスを意識することができ、良い記録を残すことができました。一方で、助走時のスピードやジャンプに入る時の体勢など、改善点も多くあげられました。

スプリントでは自己記録を更新することができましたが、1位には及びませんでした。その差は0.16秒と僅差であり、大きな悔しさを感じました。ロングジャンプと異なり、スプリントは日常的に練習可能な種目であるため、時間を見つけて改善を図っていく必要があると痛感しました。

また、選手同士が技を出し合って勝敗を決めるスケートゲームにも出場しましたが、十分な結果を残すことはできませんでした。しかし、他の選手の高い技術を間近で見ることができ、大きな刺激を受けました。

この大会を通して、多くの学びを得ることができました。学年が上がるにつれて勉強が忙しくなり、練習時間は確実に減っていきます。その中で、何ができるかを考えていきます。医師になるための勉強は膨大で多忙な毎日ですが、その中で打ち込めるものがあることで、充実した日々を過ごしています。これからも、学業とフリースケートを両立できるよう、日々邁進していきます。

**西医体優勝**

## 女子バスケットボール部

部長　松村 歩波　医学科4年

高知大学医学部女子バスケットボール部では、週３回(火、木、土)の練習を中心に活動しています。部員は下級生が多く、学年を越えて支え合いながら日々の練習に取り組んでいます。初心者の部員も在籍する一方で、近年は競技経験の豊富な部員も増え、それぞれの強みを活かしながらチーム力の向上を目指しています。

昨年度、私たちは西日本医科学生体育大会(西医体)において優勝することができました。しかし、その道のりは決して平坦なものではありませんでした。年度当初は思うように勝てない時期が続き、西医体前の四国大会でも優勝を逃し、悔しさを味わいました。その経験から、自分たちには体力面の課題があると痛感し、練習内容を見直しました。走り込みを増やし、最後まで動き続けられる体力を身につけることを意識して練習を重ねました。

チームとして大切にしたのは、「全員で戦い抜くこと」です。学年や役割を越えて意見を出し合いながら、チーム全体で方向性を共有することを大切にしました。苦しい場面でも互いに声を掛け合い、全員でコートに立つ意識がチームの成長につながったと感じています。

西医体当日は災害級ともいえる大雨に見舞われ、大会の開催自体が危ぶまれる状況でした。そのような中でも試合を行うことができ、最後まで戦い抜けたことに、関係者の皆様への感謝の気持ちでいっぱいです。日頃より支えてくださる指導者の先生方、応援してくださる保護者・OB OGの皆様に心より感謝申し上げます。今年度も、西医体連覇を目標に、チーム一丸となって日々の活動に励んでまいります。今後ともバスケットボール部への温かいご声援をよろしくお願いいたします。

## 卓球部

部長　油野 颯希　医学科2年

高知大学医学部卓球部は毎週水、金の週2回、体育館で練習しています。部員数は25名で、仲が良く穏やかな雰囲気です。自由度が高く、毎日練習に励む部員もいれば、自分のペースで楽しみながら活動する部員など様々です。

昨年度は、全医体で優勝できたものの、西医体３位、西医歯薬ベスト８と、悔しい結果もありました。

今年度は、6月の中四国大会で準優勝。優勝にあと一歩届かなかった悔しさをきっかけに、部全体で話し合いの時間を持ち、練習時間の使い方や練習内容の見直しなど、小さな課題と向き合いました。西医体優勝という目標に向け、部活動に加えて外部での練習にも参加し、個々で技術を磨き、対戦相手の分析を細かく行うなど、技術面・戦術面を意識した地道な努力を積み重ねました。

鹿児島市で開催された西医体では団体メンバーの1人が途中参加となるハプニングも起きましたが、皆冷静に目の前の1戦に向き合いました。接戦も多く緊張する瞬間も多かったものの、念願の優勝を飾ることができました。応援の声も大きく部員一同で掴んだ優勝だと感じています。個人戦でも、試合で初めて勝つことができた選手、練習の成果を発揮できた選手など、実りのある大会となりました。

西医体で優勝したことで、10月に仙台市で行われた全医体にも出場できました。普段は交流のない東日本の選手との対戦・意見交換は貴重な時間となりました。他大学から応援に駆けつけてくださった先輩方もいらっしゃって、感謝の気持ちでいっぱいの全医体優勝となりました。

来年度も西医体、全医体共に連覇できるよう、課題の克服に努め日々練習に取り組んでいきます。これからも応援のほどよろしくお願いいたします。



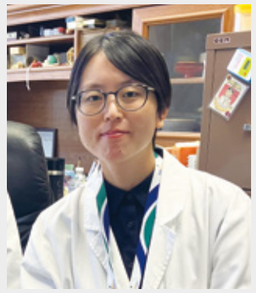


**国際交流**

## アメリカの医療を学べるハワイ大学臨床実習

実習期間：令和７年６月９日～27日

大内 雅子　医学科６年



最初の3 週間は Kuakini Medical Center の内科チームに加わり、病棟実習を行いました。内科チームは4チームあり、それぞれ卒後2年目または3年目のupper resident、卒後1年目のintern、そしてハワイ大学医学部生の3 人で構成されており、そこにobserverという立場で加わらせていただきました。毎朝night shiftのresidentからの引き継ぎから始まり、患者さんを回診し、薬の調整や検査のオーダーなどをチームで決定して行い、最後に上級医へ報告するという流れでした。チームの一員として扱っていただき、直にアメリカの臨床現場を体験することができました。

最後の１週間はFamily Medicineの渡慶次先生のクリニックで実習を行いました。バイタルチェックや血液検査、身体診察の一連の流れを先生の側で見ることができ、さらに忙しい時間帯などは、問診や基本的なバイタルチェックなどを任せてもらえました。先生には医学のことだけではなく、医者としてどのような心構えであるべきかといった哲学的なことも含めて、熱心に教えていただきました。

今回の実習を通して、アメリカと日本の医療制度の違いや、ハワイにおける貧困層の問題、薬物常用者の患者さんの治療など、様々な貴重な経験をすることができました。この経験を将来に活かしていきたいと思います。

## 台湾留学で感じた日本と台湾の医療の違い

実習期間：令和７年３月10日～14日

上岡 美月　看護学科３年

まず私が一番驚いたことは、多くの病棟に仏教やキリスト教などの宗教信者のための祈禱室があるということです。この部屋を活用し、心を落ち着かせる人、診断の説明を受ける人、お祈りを行う人がいるということから、台湾の人々の精神的なよりどころの一つに宗教が根強くあるという文化の違いを感じました。また、病室にまで僧が来てくれたり、アロマ療法やお茶の提供でリラックス効果を高めるなどの看護が行われていたりと、精神的な面まで配慮されていると感じました。

次に驚いたことは、台湾の病院の多くがボランティアに支えられているということです。ベッドメイキングや入浴介助、朝のお茶出しなどのケアをボランティアの方々が対応しており、退職後の人や学生、仕事の休日に手伝いに来る人など、“人の為に活躍したい”人が多いということを教えてもらいました。

また、授業中に台湾大学の学生が私たちに向けて経鼻経管栄養の方法を説明してくれる機会がありました。一人は中国語で、その隣でもう一人は英語で説明をしてくれている姿を見て、言語の自由さを実感しました。

今回の留学を通して、日本と台湾の医療に対する認識の違いや看護学生の実践の違い、宗教によるケアの違いなど多様性を学び、視野を広げることができました。

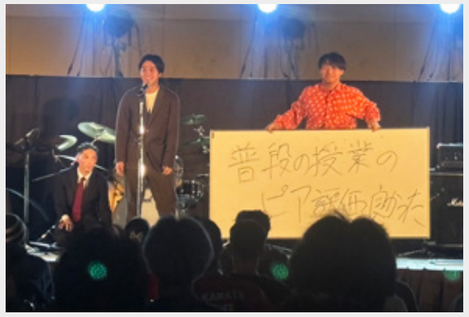
# 第43回南風祭

田辺 康太
南風祭実行委員長　医学科2年

南風祭は、学生主体の企画と運営によって創り上げられる、本学を代表する学園祭です。前年度より本格的に再開された本祭では、各部活動による模擬店の出店や、文化部による日頃の成果を披露するステージパフォーマンス、有志学生による漫才や企画発表など、多彩な催しが二日間にわたって展開されます。岡豊キャンパス全体が会場となり、普段の学修風景とは一味違った、活気と笑顔に満ちた空間が広がります。

模擬店では、学生同士が意見を出し合いながら準備を進め、接客や運営を通して協調性や責任感を育んでいます。また、文化部の発表やステージ企画では、それぞれの学生がこれまで積み重ねてきた努力や情熱が形となって表れ、観る人の心を動かします。有志企画においては、学部や学年の垣根を越えた交流が生まれ、学生一人ひとりの個性や挑戦する姿勢が際立ちます。

南風祭は、在学生だけでなく、地域の皆様や保護者様、OB・OGの方々にも気軽にご参加いただける開かれた行事です。学生と来場者との温かな交流を通じて、本学が地域とともに歩んでいることを実感していただける機会ともなっています。学生が主体的に学び、成長し、その成果を社会へ発信する――南風祭は、そうした本学ならではの魅力が凝縮された特別な時間です。ぜひ会場に足をお運びいただき、学生たちの生き生きとした姿をご覧ください。



部活動紹介

## 合氣道部

主将　幸﨑 祐亜　医学科4年

高知大学医学部合氣道部は、現在27名の部員が所属し、火曜・木曜・土曜の週3日で活動しています。部員の多くは大学から合氣道を始めた初心者ですが、経験の有無にかかわらず、それぞれのペースで活動を続けながら、自分なりの向き合い方で稽古に参加しています。

日々の稽古は、正岡師範、舛田先生のご指導のもと行われています。初心者であっても無理なく参加できるよう配慮されており、姿勢や間合い、身体の軸といった点にも目を向けた指導が行われています。こうした稽古を通して、部員それぞれが合氣道への理解を深めています。

道場では礼を重んじる空気が大切にされており、正座や礼といった所作を含め、姿勢や立ち居振る舞いを合氣道の基礎として重視しています。一つひとつの動作を区切るのではなく、流れを意識しながら丁寧につなげて行うことを大切にしており、凛とした緊張感を保ちつつも、メリハリのある和やかな雰囲気の中で稽古が行われています。

合氣道には試合がなく、演武会という形で日頃の稽古の成果を発表し、他大学との交流を行っています。コロナ禍で制限されていた活動も徐々に再開され、今年度は春に他大学との合同稽古、夏には西医体に参加しました。他大学の稽古や演武に触れることで、部員一同、多くの刺激を受ける機会となりました。

また、5月に開催されたOB・OG会は例年よりも大規模なものとなり、これまで参加が難しかった方々にもお越しいただく機会となりました。当日は世代を越えた交流が生まれ、稽古場は終始活気に満ちた雰囲気となりました。現役部員にとっても、普段はなかなか接することのない先輩方のお話を伺う貴重な機会となり、今後もこうした場を通じて多くの方に足を運んでいただければと感じています。

今後も合氣道部は、礼を重んじる稽古を基盤としながら、日々の活動に真摯に取り組んでまいります。これからも合氣道部の活動にご支援を賜れましたら幸いです。

## 写真部

部長　秦 優里奈　医学科5年

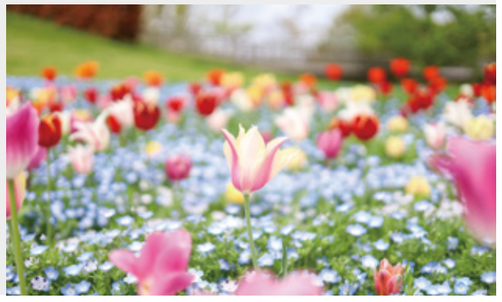
医学部写真部は、現在二十数名で活動している部活です。

「それぞれのペースで、楽しく和気あいあいと」をモットーに、写真を撮ることが好きな人たちが集まっています。活動は不定期で、学業や他の部活動と両立しながら、無理のない範囲で参加できるのが特徴です。

主な活動としては、年に数回、学外へ撮影に出かけています。今年度は、香川県のまんのう公園でネモフィラを撮影したほか、のいち紫陽花まつりや瀬戸川渓谷へ足を運び、四季折々の風景を写真に収めました。撮影の際には、お互いの写真を見せ合いながら構図や設定について話し合うことで、新たな視点を得たり、撮影技術の向上につなげたりしています。また、撮影会以外にも、個人で撮影活動を楽しんでいる部員も多く、それぞれが自由なスタイルで写真と向き合っています。

新型コロナウイルス感染症の影響で、近年は文化祭での展示が行えない状況が続いていましたが、今年度からは写真コンテストにも積極的に応募し始めました。来年度には写真甲子園への応募も検討しており、部として新たな挑戦を始めています。

写真部は初心者大歓迎の部活で、部員の半数以上が初心者からのスタートです。最初はスマートフォンで写真を撮り始める人も多く、カメラの種類や経験は問いません。また、ほぼ全員が他の部活と兼部しており、運動部と両立している部員も多くいます。とにかく自由な雰囲気の中で活動できるのも魅力の一つです。写真を通して、これからも楽しく活動を続けていきたいと思います。



## 新任のご挨拶

### 宮地 英行

消化器内科学講座 教授

2024年5月1日より消化器内科学講座の胃腸内科を担当することとなりました宮地英行でございます。肝胆膵内科の内田一茂先生と緊密に連携し、本学・本医学部の発展に尽力してまいります。

1993年入試で初めて高知を訪れました。帰りの特急を待つ間に路面電車で桟橋に行った際、ふと「妻と高知に赴きました」と回想する不思議な場面が頭に浮かびました。今にして思えば「未来の記憶」だったのかもしれません。在学中は柔道やよさこい、南国の気風に育てていただき、卒業後は神戸大学第二内科に入り、大学院ではピロリ菌の遺伝子を研究しました。2007年「大腸内視鏡の世界的権威」と称された工藤進英先生の門を叩いて横浜へ移り、拡大内視鏡診断の最前線で大腸腫瘍の研究とAI開発に携わりました。このたび、思いがけず公募の知らせを聞き、自身の原点を見つめ直し、高知に還ってまいりました。

大腸がんは、がん死亡の全体で2位、女性では1位であり、高齢者だけでなく働き盛り世代も多く亡くなっていますが、県内の内視鏡医は少なく、また肝胆膵の担い手も潤沢ではありません。消化器内科の総合力を高める必要があり、その端緒は人材育成にあると考えます。着任して多くの優秀な学生や研修医に出会いました。彼らが夢を抱き、高知から世界へ挑戦できる環境を整えてまいります。昨今、知識は瞬時に得られる時代となりましたが、だからこそ、どこへ進むのかという意思が重要になります。自らの哲学と物語を胸に、どのような医療人として生きるのかを問い続ける姿勢を育みたいと思います。

本医学部は、1期生の教授陣が退官される節目を迎え、世代交代が進んでいます。気鋭の教授陣が躍動し新しい時代の胎動が日ごとに力を増しています。一方、医療経済は厳しさを極め、高齢化と人口減少が加速しています。この変化の時代に世界を眺め、真理を探究し、新たな医療の未来を切り拓いていくには、皆様のご協力が不可欠です。末永く、ご指導、ご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

## 新任のご挨拶

### 池田（谷口）真理子

小児思春期医学講座 教授

この度、令和７年４月１日付で高知大学医学部小児思春期医学講座に着任いたしました池田（谷口）真理子と申します。私は小児科医として臨床に携わりながら、分子生物学・臨床遺伝・小児神経・幹細胞医学を専門に研究を続けてまいりました。医療が高度化・多様化する中で、専門的知識や技術のみならず、倫理観やコミュニケーション能力、そして地域に根ざした視点をもつ医療人の育成がますます重要になっていると感じています。

一方で現在、少子化の進行や小児科医師の地域偏在、成り手の減少など、小児医療を取り巻く課題は少なくありません。しかし、小児科は子どもの成長を支え、ご家族の不安に寄り添い、未来につながる医療を届けることができる、非常にやりがいのある分野です。病気を診るだけでなく、子どもを診て、家族を支え、地域全体を守る――その魅力は、臨床の現場に立つほどに実感されます。

また私自身、治療法のない神経難病に対して“患者さんに治療を届けたい”という思いを原点に研究を続けております。基礎研究から臨床へつなげ、少しでも患者さんの未来を変えられる医療の実現を目指して取り組んでいます。

高知大学小児科の大きな特色は、幅広い領域に対応できる“オールマイティ”な医師が多く、それぞれが多様な疾患に適切に向き合える力を備えている点です。これは地域医療を支えるうえで大きな強みであり、若い先生方や学生の皆さんにとっても、実践を通して総合力を身につけられる貴重な環境だと思います。これから私達小児科は、学生の皆さんが安心して学びに向き合えるよう支援させていただくとともに、「小児科をラウンドして良かった」と感じられる魅力ある学びと職場づくりに尽力してまいります。小児科を志す仲間が一人でも多く育ち、ともに高知の子どもたちの未来を支えていけることを心より期待しております。

※宮地英行教授は、令和６年５月１日付けで 着任されておりますが、事務の手違いにより、掲載が１年遅れましたことをお詫びいたします。



新任教授紹介

## 新任のごあいさつ

### 山田 久方

免疫学講座 教授

この度、2025年6月1日付けで、高知大学医学部免疫学講座教授を拝命いたしました山田久方と申します。よろしくお願い申し上げます。

私は1992年に九州大学医学部を卒業し九州大学整形外科に入局しました。研修医時代、当時は有効な治療法のなかった関節リウマチ患者さんを多く担当し、免疫学を学ぶ必要性を感じました。そこで研修医終了後、九州大学生体防御医学研究所免疫学教室で野本亀久雄教授のご指導の下で一から学び、学位取得しました。その後のスウェーデン留学先では関節炎モデル研究を行い、帰国後数年臨床教官を務めた後の2005年、吉開泰信教授の九州大学生体防御医学研究所感染制御学分野に准教授として赴任、感染症モデルなどの基礎研究とともに、臨床検体を用いたヒト免疫学研究を行いました。退任後もリウマチ診療と免疫学研究の二足の草鞋を履き続けていたところ、当学で教室を構える機会を与えていただいた次第です。

このように私の免疫学研究は臨床と密接に繋がってきました。これからもヒト基礎免疫学という、臨床と基礎の境界領域の研究を中心に活動を展開していきたいと考えています。またこのような研究を通じて、できるだけ多くの臨床分野の先生方と連携を図り、高知大学の発展に貢献したいと考えています。

学生教育においても、これまでの経験を活かし、臨床と免疫学のつながりが実感できるよう工夫したいと思います。医師に求められる免疫学の知識を確実に習得してもらうとともに、一人でも多くの学生に免疫学を好きになってもらえるよう努力します。

最後に教室のご紹介です。当教室には准教授の清水健之先生、助教の小松利広先生の、二名の優れたスタッフが在籍しています。施設も充実しています。この恵まれた環境を活かして、いろいろなことに挑戦していきたいとワクワクしているところです。今後のご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

## 教授就任のご挨拶

### 倉林 睦

病理学講座 教授

令和7年9月1日付で高知大学医学部病理学講座を拝命いたしました倉林 睦と申します。

私は平成9年に高知医科大学医学部を卒業し、高知医科大学第2外科学教室に入局と同時に大学院に進学し、旧第2病理学教室にて学位を取得しました。組織観察は静的な行為ですが、顕微鏡下の疾患の原因、経時的な病変の変容、生体の防御反応など疾患の本質を示す極めて動的な姿に魅了され、病理医を志しました。

医学部教育では、この病理学の有する疾患の本質を探究する魅力を学生が体感できるよう授業(実習)を工夫し、治療、研究に真摯に向き合い疾患に対峙する医師の育成を目指しています。また、大学院教育ではこの魅力を原動力に、医学者として忍耐強く真理を追い求める姿勢を共に培いたいと考えています。

研究では、副交感神経賦活化と肝の糖代謝の関連性を一貫して研究し、肝での糖取り込み亢進や糖新生抑制により血糖を低下させるという機序を網羅的に示してきました。現在、この研究成果の臨床研究への発展を目指しています。病理には基礎医学の側面と臨床科(病理診断科)の側面があります。トランスレーショナルな研究を目指すとともに、我々の組織学的評価力を、高知大学の研究発展に貢献させたいと願っています。

病理診断においては、病理診断科として、病理診断部と共に附属病院における病理診断の質の向上に尽力し、病理専門外来を発展させ、附属病院の医療、運営に貢献したいと考えています。近年、遺伝子変異の検索やゲノム医療の発展等により、病理診断においても地域医療機関との密な連携、診断体制の維持が重要となっています。現在、高知県下の主要病院の病理専門医は高知大学からの派遣医師で密な意思疎通が可能ですが、学生や研修医との交流を積極的にもち、将来の高知県の病理診断を担う人材確保に努め、病理診断体制の維持に努めて参ります。

どうか今後ともご指導ご鞭撻を賜りたく宜しくお願い申し上げます。

## 着任のご挨拶

岸 誠司

内分泌代謝・腎臓内科学講座
教授

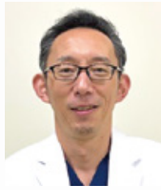
2025年9月1日付で、高知大学医学部内分泌代謝・腎臓内科学講座の教授を拝命いたしました岸誠司と申します。

私は2000年に徳島大学医学部を卒業し、同大附属病院での研修を皮切りに、市立舞鶴市民病院（総合診療医ドクターGのモデルになった病院です）、および兵庫県立尼崎病院で内科医・腎臓内科医としての研鑽を積みました。卒後7年間市中の急性期病院で臨床医としてしっかり鍛えていただいたことがその後の私の基礎になりました。

2007年に徳島大学に医員（社会人大学院生）として帰学し、診療と基礎研究をなんとか両立しこの間に学位と専門医資格を取得しました。思えば、初期臨床研修制度の開始とともに、地方国立大学が医師不足に突入した最前線にいたと思います。その後、2012年には米国ハーバード大学・ブリガムアンドウィメンズ病院へ博士研究員として留学いたしました。世界最先端の研究環境で過ごした三年間は、私の研究者としての視野を大きく広げる貴重な経験となりました。帰国後は徳島大学を経て、2018年より川崎医科大学に招聘いただき総合臨床医学准教授をへて腎臓・高血圧内科学特任准教授として、診療・研究・教育に力を注いでまいりました。振り返れば、これまでの歩みは多くの素晴らしい師や仲間との出会いに支えられ成長させていただいた時間の積み重ねであったと深く感謝しております。

高知大学では、市中病院、地方国立大学そして私立医科大学とそれぞれ異なる環境で培った経験を活かし、領域横断的な視点で地域の健康長寿に貢献するとともに、次世代を担う若手の先生方が「成功体験」を積める教育環境を整えてまいる所存です。「敬天愛人」の精神を礎とし、明るく誠実な教室運営を通じて、高知県の医療課題に真摯に向き合い、高知から世界へ発信できる成果を創出してまいります。今後とも温かいご指導、ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

## 新任のご挨拶



山縣 憲司

歯科口腔外科学講座 教授

2025年9月1日付けで高知大学医学部歯科口腔外科学講座の教授を拝命致しました山縣 憲司と申します。1997年に北海道大学歯学部を卒業後、筑波大学附属病院歯科口腔外科に入局し28年を過ごしました。歯科口腔外科は口腔疾患の外科的治療を主に行う診療科です。う蝕、歯周疾患などの治療を行う一般歯科と異なり、埋伏智歯の抜歯、顎関節症治療、口腔癌治療、顎変形症治療、口唇口蓋裂治療、口腔粘膜疾患、歯科インプラント治療などを専門としています。

口腔は狭い領域に、舌、口底、上下顎骨、頬粘膜、口底など含まれ、構音、摂食嚥下などの生きていく上で不可欠な様々な機能があり、さらに顔面の審美的な部分にも関与します。

私は主に口腔癌および顎変形症治療を専門としております。口腔癌に関しては、切除で機能障害を生じるため解剖を熟知し繊細な手技が必要で、機能回復のための再建手術、リハビリテーションなどが必要になります。手術が治療の主体となりますが、それ以外に補助的に放射線療法、化学療法が行われ、最近は分子標的治療薬、免疫チェックポイント阻害薬も加わりました。

顎変形症治療は、歯科矯正治療で歯の移動だけでは、下顎前突、上顎前突などの骨格的な上下顎骨の異常を改善できない場合に、手術（上顎Le Fort I骨切り術、下顎枝矢状分割術、オトガイ形成術など）を組み合わせる方法で、良い結果を得るため、最近では標準的な治療法となっております。

今後、目標とすることは1）基礎、臨床研究を発展させ研究費および業績を増やす。2）医療安全を第一に、治療結果の担保された質の高い手術手技で行う。3）研修医、医員にとって魅力のある研修内容とし、若手人材の育成を目指したいと考えております。現在、医局員数は7名ですが、少数精鋭で力を合わせて診療、研究、教育に取り組んでいきたいと思います。今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い致します。



新任教授紹介

## 新任のご挨拶

盛實 篤史

総合診療部 教授

令和7年9月1日付で総合診療部に着任いたしました盛實篤史（もりざね あつし）と申します。私は自治医科大学を卒業後、高知県の地域医療に従事し、プライマリ・ケアに加えて総合内科、救急・集中治療、災害医療を研鑽したのち、この度ご縁を賜りました。何卒よろしくお願い申し上げます。

当部は平成9年に設置され、「常に患者さんの必要としているもの、社会が医療に求めるものに応える存在」を目指して歩んでまいりました。昨今、高知県では高齢化と人口減少、医療資源の偏在が同時進行し、「限られた医療資源で、いかに地域全体の健康を守るか」という難しい問いに直面しています。この課題に向き合う上で総合診療の視点は重要であり、その中心となる総合診療医の育成は急務です。地域や組織全体を見渡し、答えのない課題に対しても行動できる医師・医療者を増やすことが、私たちの使命と考えています。また講義や実習、他大学とのプロジェクトなどを通じ多くの学生と日々向き合っており、今後も卒前・卒後を通じて将来どの診療科に進んでも役立つ「考える力」や「人に向き合う力」を身につけられるよう力を注いでまいります。さらに遠隔医療や医療DX・地域連携など、現場のニーズや課題を研究・教育に昇華させ実践へ還元するとともに、本県が先進的に進める地震対策、とりわけ復興期を支える医療者の育成・教育は総合診療医の育成と深く通じる部分であり、今後のテーマと位置づけています。本稿をご高覧くださっている皆様とともに「高知で学んでよかった、高知で働きたい」と思えるキャリアパスを発展させられれば幸いです。

最後になりますが、これまで当部をお引き立てくださった皆様に改めて深く感謝申し上げますとともに、学生・研修医の受け入れや地域での学びの場のご提供など、一層のご理解とご協力を賜れましたら大変心強く存じます。

今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

## 新任のご挨拶

永井 立平

産科婦人科学講座 教授

令和7年12月1日付で、高知大学医学部産科婦人科学講座教授を拝命いたしました、永井立平（ながいりゅうへい）です。私は高知医科大学18期生として、大学入学と同時に高知へ移り住み、今年で30年という節目の年を迎えました。学生時代から現在に至るまで、本学および関連施設において臨床・教育・研究に携わり、多くの先生方、同僚、そして地域の皆様に支えられて歩んでまいりました。

産科婦人科は、妊娠・出産という人生の大きな節目に立ち会うと同時に、婦人科疾患や女性の健康管理を通じて、女性の一生に寄り添う診療科です。私はこれまで、特に周産期医療を中心に、ハイリスク妊娠や母体合併症を有する妊産婦さんの診療に携わってきました。その中で常に考えてきたことは、「世界レベル、日本レベルで行われている医療を、高知においても情報提供し、患者さんが方針を選択出来る体制を整えたい」ということです。地域であることを理由に医療の質に差が生じることなく、どこに住んでいても適切な医療を享受出来ることが重要であると考えています。

高知県は地理的条件や少子高齢化など、多くの課題を抱える一方で、医療者同士の距離が近く、顔の見える連携を築きやすい地域でもあります。本学産科婦人科は、県全域の周産期・女性医療を支える中核として、診療の質向上と人材育成の両立を担ってきました。今後はこの強みを生かし、「オール高知」で取り組む医療体制のさらなる充実と、次世代を担う医師の育成に力を注いでまいります。

学生・研修医の皆さんには、産科婦人科のやりがいと奥深さを実感し、自らの将来像を主体的に描ける環境を提供したいと考えています。教育・臨床・研究のいずれも大切にしながら、高知から全国、そして世界へと発信できる産科婦人科学教室を目指し、誠実に取り組んでまいります。今後とも皆様のご指導とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

## 新任のご挨拶

### 沖中 由美

臨床看護学講座 教授

令和7（2025）年4月1日付で、高知大学臨床看護学講座教授を拝命いたしました沖中由美と申します。よろしくお願いいたします。

私は、愛媛県立医療技術大学 助手、島根大学医学部看護学科 講師、岡山大学大学院保健学研究科 准教授を経て、教育・研究の経験を積み、高知大学に着任いたしました。

主な研究テーマは、健康障害をもちながら「老いを生きる」高齢者の在宅生活支援です。研究代表者として4回の科学研究費の助成を受け、在宅療養・介護における高齢者のQOLを支える在宅ケアモデル、認知症とともに「老いを生きる」高齢者の尊厳とQOLを保障する在宅ケアモデル、高齢者の医療・ケアの選択において、最期まで自分らしく「老いを生ききる」ことを可能にするACP（アドバンス・ケア・プランニング）実践型ケアモデルの構築に関する研究を行っています。

岡山大学では、産学連携事業として、愛知県にある企業と、高齢者の排泄検知センサの検証に関する共同研究（研究代表者）を行いました。高齢化率の高い高知県では、地域で暮らす高齢者の健康維持・回復と、地域のニーズに応じた生活支援のために、看護の専門性を活かしつつ多職種・多部門の皆さまと協働しながら活動していきたいと考えています。

学会等の活動では、日本学術振興会科学研究費の審査委員を務めたほか、看護系全国学会である日本看護科学学会の編集委員、日本看護研究学会の評議員、日本老年看護学会の代議員として活動しています。また、日本看護研究学会、日本老年看護学会などの学術雑誌や学術集会の査読委員としても積極的に研究・学会活動に取り組んでいます。

これらの経験を活かし、高知大学では、高い倫理観と探求心をもつ看護職を育てるとともに、研究の魅力を伝えながら、研究成果を看護学や社会へ還元できる研究マインドをもつ教育・研究者の育成に努めたいと思います。

今後ともご指導ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 地域と教育研究機関の架け橋に

### 野村 美紀

地域看護学講座 教授

「高知大学の卒業生は各地で広く活躍しています。これからも良い人材を数多く育ててください。」これは私が、令和7年9月1日付で高知大学医学部看護学科地域看護学講座の教授を拝命し、就任にあたり県内の職能団体へご挨拶に伺った際に頂いた激励の言葉です。この言葉を通じ、本学が長年にわたり積み重ねてきた教育・研究に対する社会からの厚い信頼と期待の大きさを改めて実感いたしました。そして同時に、「地域になくてはならない存在である高知大学」の一員として、身の引き締まる思いがいたしました。

私は高知女子大学で学び、看護師、保健師として実務に携わりながら、修士・博士課程を経て教育・研究の道を歩んでまいりました。研究では、保健師としての現場経験を起点に、糖尿病のリスクのある方々の曖昧な状況への対処や、生活習慣病予防におけるヘルスコーチングの構造化など、常に「生活の場」に根差したテーマに取り組んできました。また、保健師による東日本大震災復興支援プロジェクトに参画した際には、住民と共に課題を解決していく「地域づくり」の重要性を再認識しました。現在は、ギャンブル等依存症者の家族支援に関する研究を進めています。これからも地域での健康づくりに寄与する実践的な研究を探求していく所存です。

今後は、在宅看護、高齢者看護、公衆衛生看護の知見が集結する本講座の強みを最大限に活かし、教育・研究と地域を密接に繋いでいきたいと考えております。また学生が、保健師活動の醍醐味である「みる・つなぐ・うごかす」という姿勢で多角的な視点で地域を捉えるアセスメント力と、対象者へ直接届くアウトリーチの実践力を培えるよう支援します。

このように教育と研究を両輪として、地域から真に求められる人材を育成し、地域社会に貢献する、そのための「架け橋」となるべく精進してまいります。今後ともご指導とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。





## 退任のご挨拶

### 佐藤 隆幸

生理学講座（循環制御学）教授

このたび３月末日をもちまして定年退職することとなりました。在職中は多大なるご厚情を賜り、心より深く御礼申し上げます。

昭和54年に本学に入学してからの６年間、助手・教授としての約30年間もの間本学に所属しておりましたので、人生の半分以上を岡豊キャンパスで過ごしたことになります。いつの時代も過ぎ去った時代の流れは早く「いま」は大きく変化するものです。しかし、どなたにも、「古き良き時代」があったものと思います。

私の研究分野は基礎医学でした。平成に入ってからは短期間で研究成果を上げ社会に対する説明責任を果たす、ということが求められるようになりました。おのずと、結果が出そうなテーマ設定をせねばならないという社会の雰囲気が漂い始めました。しかし、幸い私は、前任地ですぐの結果を求めない師に恵まれ、「良き時代」を過ごせました。放牧されたような環境の中で試行錯誤しながら学際的アプローチ（半導体デバイス・システム制御工学、遺伝子工学、システム生理学等）を自由に行うことができました。この経験は、方法論にとらわれずに研究を進める術を学ぶのに大いに役立ちました。2000年に現教室に着任後は、できるだけそのような学際的研究手法の環境整備に努めるとともに、本当は好奇心がドライブしている研究であっても、「何々の役に立つ」と説明をしながら研究を続けてきました。「いま」はさらにコスパ・タイパ至上主義が台頭し、時流に抗うことが困難になってきていることを懸念しています。人材のゴールに一直線な促成栽培や銅鉄研究は、効率の向上につながりますが、試行錯誤してみること、方法論にこだわらずにチャレンジしてみることがアカデミアの神髄ではないのだろうかと思うのです。退職後もプライベートラボを立ち上げ、自身の研究スタイルは続けて行こうと考えています。今後も連携・支援をお願いすることがあると思いますが、よろしくお願いいたします。

## 退任のご挨拶

### 大畑 雅典

微生物学講座 教授

2期生として1979年に高知医科大学に入学以来、5年間の米国留学を除く42年間を高知医科大学と高知大学医学部でお世話になりました。関係者の皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

卒業後は第三内科（血液・呼吸器内科）に入局し、恩師の三好勇夫教授からは臨床実践とともに、研究の面白さを教えていただきました。米国マサチューセッツ大学留学中にはがんウイルスの研究に没頭することができました。この貴重な経験により、新しい知見や珍しい知見を得ることがあれば、それを世界共通の知識とすべく論文の形にしないといけないという考えに至りました。価値あるものを偶然見つける能力を意味する「Serendipity」を座右の銘に、臨床業務にあたりました。

ある時、ヘルペスウイルスの一種であるHHV-6が高用量で感染したリンパ腫患者を経験したことを契機に、HHV-6が染色体に組み込まれて子孫に伝播することを世界で初めて突き止め、LancetやBloodなどの国際的に評価の高い科学誌に掲載することができました。今ではinherited chromosomally integrated HHV-6（iciHHV-6）と命名され、世界共通の知識となりました。まさに偶然を幸運に変えるSerendipityの重要性を痛感させられた症例でした。

2009年からは微生物学講座を主宰させていただくことになりました。基礎医学のための基礎研究でなく、基礎医学と臨床医学の融合から生まれる新しい知見を得ようと心掛けました。そのため数多くの臨床医学講座と共同研究を行い、ウイルス感染が疾患にどのように関与するかを明らかにしてきました。その研究成果はインパクトの高い英語論文で発表し、新聞などのマスコミにもしばしば取り上げられ注目されました。教育においても、基礎的な知識だけを学生に教えることは避けました。ここでも臨床医としての経験から得られた実践的な知識を伝授することに心掛けました。基礎と臨床をブリッジする教育に努めたところ、学生のアンケートからは毎年のように高評価を受けることができました。私が17年間におよぶ微生物学講座の教授を務めて明らかになったことは、基礎医学研究・教育は基礎のみにあらず、ということです。

40年以上に渡ったリサーチジャーニーは無事ランディングを迎えることができました。退任後は微力ながら内科医として地域医療に携わっていきたいと考えています。引き続きご支援を賜りますようお願いいたします。高知大学医学部のさらなる発展を祈念し、お礼の挨拶とさせていただきます。

# 医学部 Topics ▶ 2025

## Topic 01 学生支援

越知町より、学生への食糧支援をいただきました。

令和７年10月7日、22日に越知町より学生への食糧支援をいただきました。当日はご当地キャラクターのよコジローも登場し、越知町産のお米、野菜、ゆずジュースや芋ケンピなど提供していただきました。

## Topic 02 相良賞 授与式について

令和７年４月、令和６年度先端医療学推進センター学生顕彰制度「相良賞」授与式が行われました。今年度は、相良賞 金賞１名、銀賞４名の５名が受賞しました。(医学科５年生２名、４年生１名、３年生１名)

金賞は４年生修了時に卓越した研究成果を上げた学生に、銀賞は各学年において目覚ましい研究成果を上げた学生に授与されます。

## Topic 03 医学科同窓会の取り組み

医学科同窓会HP

医学科同窓会は、南風祭等の行事や医師国家試験対策のための経費等、学生に対する支援を継続して行っています。また、医学科４年生に対して３月から始まる臨床実習用の白衣を贈呈しています。
同窓会ホームページでは、年２回発行の同窓会報「やまもも」をご覧になれますので、是非ご利用ください。

## Topic 04 高知大学看護学同窓会

看護学科同窓会HP

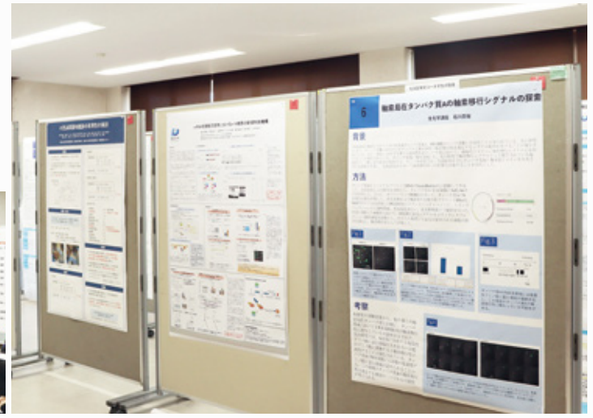
高知大学看護学同窓会は、会員相互の親睦と福利厚生、及び高知大学の発展に協力することを目的に活動しています。令和７年度は、第25回KMS Research Meeting等への寄付や、卒業生の母校訪問事業への協賛のほか、研究助成や卒業記念品贈呈などの活動を行いました。

Topic 05

## 准教授講師会の活動

准教授講師会HP

医学科学生を対象に「研究医学英語」の講義を担当し、複数の准講会会員がオムニバス形式で授業を行っています。また、学生の研究発表の場として「KMSリサーチミーティング」を開催しています。



医学部 **Topics** ▶ 2025

Topic 06

## インスタ開設

高知大学医学部の公式インスタグラムを開設しました。

高知大学医学部に関する様々な情報をお届けします。

@KMS_KOHO

フォローをお願いします

# 学生数

■令和７年度（2025 年度）学部学生

| 学科 | 医学科(名) | | | | | | 看護学科(名) | | | | 合計(名) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年次 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| 計 | 110 | 121 | 120 | 123 | 125 | 106 | 72 | 58 | 61 | 62 | 958 |

# 国家試験合格状況

■医師国家試験合格状況

| 回数 | 実施年 | 卒業生 | 受験者(名) | | | 合格者(名) | | | 合格率(%) | | | 総合順位 | 国立大学順位 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 新卒 | 既卒 | 計 | 新卒 | 既卒 | 計 | 新卒 | 既卒 | 計 | | |
| 第115回 | R3 | 第17期生／125名 | 125 | 10 | 135 | 118 | 4 | 122 | 94.4 | 40.0 | 90.4 | 57/80 | 32/43 |
| 第116回 | R4 | 第18期生／109名 | 109 | 14 | 123 | 102 | 5 | 107 | 93.6 | 35.7 | 87.0 | 77/80 | 42/43 |
| 第117回 | R5 | 第19期生／124名 | 124 | 14 | 138 | 121 | 8 | 129 | 97.6 | 57.1 | 93.5 | 37/82 | 17/43 |
| 第118回 | R6 | 第20期生／118名 | 118 | 9 | 127 | 109 | 3 | 112 | 92.4 | 33.3 | 88.2 | 76/82 | 41/43 |
| 第119回 | R7 | 第21期生／101名 | 101 | 14 | 115 | 99 | 9 | 108 | 98.0 | 64.3 | 93.9 | 38/82 | 17/43 |

■看護師国家試験合格状況

| 回数 | 実施年 | 卒業生 | 受験者(名) | | | 合格者(名) | | | 合格率(%) | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 新卒 | 既卒 | 計 | 新卒 | 既卒 | 計 | 新卒 | 既卒 | 計 |
| 第110回 | R3 | 第17期生／67名 | 58 | 2 | 60 | 58 | 1 | 59 | 100.0 | 50.0 | 98.3 |
| 第111回 | R4 | 第18期生／65名 | 55 | 1 | 56 | 55 | 1 | 56 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 第112回 | R5 | 第19期生／71名 | 61 | – | 61 | 61 | – | 61 | 100.0 | – | 100.0 |
| 第113回 | R6 | 第20期生／65名 | 55 | – | 55 | 55 | – | 55 | 100.0 | – | 100.0 |
| 第114回 | R7 | 第21期生／62名 | 62 | – | 62 | 62 | – | 62 | 100.0 | – | 100.0 |

■保健師国家試験合格状況

| 回数 | 実施年 | 卒業生 | 受験者(名) | | | 合格者(名) | | | 合格率(%) | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 新卒 | 既卒 | 計 | 新卒 | 既卒 | 計 | 新卒 | 既卒 | 計 |
| 第107回 | R3 | 第17期生／67名 | 26 | 1 | 27 | 26 | 1 | 27 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 第108回 | R4 | 第18期生／65名 | 25 | – | 25 | 25 | – | 25 | 100.0 | – | 100.0 |
| 第109回 | R5 | 第19期生／71名 | 25 | – | 25 | 25 | – | 25 | 100.0 | – | 100.0 |
| 第110回 | R6 | 第20期生／65名 | 22 | – | 22 | 22 | – | 22 | 100.0 | – | 100.0 |
| 第111回 | R7 | 第21期生／62名 | 30 | – | 30 | 30 | – | 30 | 100.0 | – | 100.0 |

## 編集後記

おこうだより第23号をお届けします。

今号では、医学部総合防災訓練の様子を特集としてご紹介しました。実際に訓練を行うことで、設備や連絡体制などの課題も見えてきますが、それらを一つ一つ積み重ねていくことが、将来の大きな備えにつながっていくことでしょう。南海トラフ巨大地震などの大規模災害時に高知県の医療の砦を守るという役割にとどまらず、医学部と附属病院が協働して取り組むことで、学生や教職員の防災・減災への意識を高める機会にもなっていることが、対談記事から感じられました。

誌面ではそのほかにも、クラブ活動や地域活動、国際交流など、学生たちがいきいきと活躍する姿が数多く紹介されています。日々の学びに加え、さまざまな経験を重ねながら成長していく学生の姿は、医学部の大きな活力です。本誌を通して、その様子を感じていただければ幸いです。

"As for the future, your task is not to foresee it, but to enable it."（未来とは、予測するものではなく、それを可能にするものだ。）—『星の王子さま』の作者として知られるサン＝テグジュペリの言葉です。

2028年には高知医科大学開学50周年という節目を迎えます。今回、退任のご挨拶を掲載させていただいた先生方の多くは、本学の黎明期にここで学ばれ、教員として大学の歩みを支えてこられました。寂しさもありますが、私たちはその歩みから受け取ったバトンを手に、次の時代へと走り続けていかなければなりません。高知大学医学部の未来をただ「想像する」のではなく、自分たちの手で「創造する」という覚悟を持って走りたいものです。

高知大学医学部・旧高知医科大学
開学50周年記念サイト

おこうだより編集委員会 委員長　阿波谷 敏英


# おこうだより　未来を拓く、新たな力

編　集　阿波谷 敏英、井上 啓史、古宮 淳一、手島 直則、山﨑 直仁、今村 潤、角 環、石岡 洋子、下元 理恵
発　行　高知大学医学部おこうだより編集委員会
発行日　令和8年3月

高知県南国市岡豊町小蓮　TEL 088-866-5811（代）